

# ホワイトボックス化の モビリティ社会へ 夢想流学際思考の視点から

小口泰平 Yasuhei OGUCHI



芝浦工業大学名誉学長・  
名誉教授

凜として誇りある学際思考を

1974年9月17日に国際交通安全学会が設立されて40年、時の流れの速さと価値観の変化をしみじみと感ずる次第である。当時、設立に向けて、とりあえず大脳生理学、ジャーナリズム、交通工学、環境心理学、自動車工学の若手が、ホンダ安全運転普及本部の西田通弘本部長（本田技研工業(株)副社長。後にIATSS副会長）および同事務局重鎮中の重鎮鈴木辰雄氏（後にIATSS事務局長・常務理事）に招集を受ける。この集まりは、それぞれが多忙な日々のため早朝7時頃からの朝食会となり、赤坂紀尾井町にて開催。夜型の約3名は寝ずに駆けつけていた。設立に向けての理念、研究調査の在り方、Interdisciplinary（当時日本語表現は未確定、後に「学際」）の意義、各専門分野の限定会員制など、それなりの概念規定ながらも、目的は明確にかつ凜とした姿勢をもって始動したように記憶している。ところでその頃。

水が嫌いなトビハゼ

飛ぶことが嫌いなヤンバルクイナ

学ぶことが嫌いな学究人

この世の中には変な生きものがある  
でもこうした生きものも立派な生きものである  
私は大好きだ

このヘンテコな詩を後生大事に筆で書いては楽しんでたハミダシ者にとって、学際思考との出会いは感動そのものであった。当時、学会の多くは、ともすると目的と手段を取り違えて「Know how」の虜になり、「Know what」や「Know why」を置き去りにして、縦割の学術に陥っていることが多かったためなおさらであった。

ブラックボックスからホワイトボックスへ

時は流れ、学際思考は一般化してきた。クルマ社会も大きく変わり、クルマが憧れの時代からごく身近な存在へ。そして今では特段の存在感は薄れつつある。かつて、故障は当たり前で、冬はバッテリー上りにも気を遣った。チューブ入りタイヤが釘を拾うパンクもよくあった。箱根の山越えでオーバーヒートを起こし、エンジンを冷やすのにひと休み。ボンネットを開けてあちこちを叩いてみる。キャブレターのごみが流れて「グググ・グワーン」と始動することも。触って過熱を探ったり、ククンと嗅いでは見当をつけたりもした。

そもそもハードウェアは、見て、触って、ときには音を聞いて、振動や動きを感じ取って正常か異常かを五感により判断してきた。ところがソフトウェアのITの世界はシステムの高知能化をもたらしたが、一方で「五感を超える六感の世界」のように、故障するといきなりアウトになる。味も素っ気もないブラックボックスである。まさに「感謝・感激・雨・霰」ではあるが、願わくはITのホワイトボックス化による明解かつ「明快なる」高度クルマ社会創りを目指してほしいものだ。このホワイトボックス化ITは、使い手に「見える・解る・対処し易い」しかも「高度高質化」の技術を支えるものでありたい。

かくあれば、エネルギー環境問題を真摯に受け止める電気自動車への回帰や自動運転システム創りを拓き、真に安心・安全・快適なモビリティ社会に向けた力強い歩みが期待されよう。

1937年長野県生れ。自動車工学・ヒューマンマシンシステム。工学博士(東大)。59年芝浦工業大学卒。東京大学生産技術研究所研究員を経て68年芝浦工業大学助教授、教授。91年同システム工学部長。97年同学長。2005年同名誉学長・名誉教授。01年日本自動車殿堂会長。(会長/1974年会員就任)